

期間番号 : 33906

研究種目 : 若手研究 (B)

研究期間 : 2011~2013

課題番号 : 20720083

研究課題名 : トニ・モリスンの小説における「母性」の政治学

研究課題名 : The Politics of Motherhood in Toni Morrison' s Novels

研究代表者 : 戸田 由紀子 (TODA YUKIKO)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号 : 40367636

研究成果の概要 (和文) : 本研究では、トニ・モリスンの小説が「母性」の言説をどのような政治的レトリックとして用いているかを、「共和国の母」の理念と「近代母性のイデオロギー」といった 19 世紀に大量生産された「母性」の言説と、黒人女性との歴史的関係を踏まえて考察した。公民権とフェミニズムを経た現代黒人文学では、黒人女性たちの多様な「母性」を自己定義することができるようになった。しかしその一方で、奴隷制や人種間の非常にデリケートな問題を扱う場合には、白人の「近代母性のイデオロギー」が戦略的に用いられていることを分析し、人種とジェンダーの問題が根強く残るアメリカ社会をモリスンの小説が提示しながら批判していることを論じた。

研究成果の概要 (英文) : This research examined the politics of motherhood in Toni Morrison' s fiction from a historical perspective, taking into consideration the abundant motherhood discourse produced during 19th century America including the concept of "Republican motherhood," and the historical relationship between black women and the mainstream motherhood ideology. Contemporary black literary works produced after the civil rights movement and feminism movement have attempted to introduce a definition of motherhood distinctive to African American women. At the same time, however, authors such as Toni Morrison uses the mainstream motherhood ideology when dealing with delicate issues such as interracial violence under slavery, both to reveal and criticize the existing gender and racial problems in the American society today.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野 : アメリカ文学、アフリカ系アメリカ人文学

科研費の分科・細目 :

キーワード : アメリカ文学、黒人女性文学、トニ・モリソン、母性

1. 研究開始当初の背景
黒人女性文学研究は他のマイノリティ文学研究と同様、1960年代の公民権運動、黒人運動、第二派女性解放運動後盛んに行われ

てきた。アプローチの仕方は多様だが、人種、性、そして階級といった差別によって排除されてきた人々の主体的なアイデンティティがいかに表象されているかといった基本的

な共通課題が見受けられる。

研究代表者はトニ・モリスンを中心とした黒人女性文学に描かれる被抑圧者である黒人女性の経験がどのように語られ（語りの技法）、どのように表象されているかを中心に研究を進めてきた。本研究は、これまでの研究でも考察してきた黒人女性文学における母と娘の關係に着目し、「母性」をキー概念として母の側から検討する。黒人女性文学に限らず、女性の経験は多くの場合娘の立場から語られるためか、研究代表者も含めて小説の分析は娘の側からが主である。そのため、「母」の経験は引き続き抑圧されたまま語られることが少ない。しかし女性の経験のなかでも大きな比重を占める母側の語りに耳を傾けることは、母と娘の關係だけでなく、母／「母性」のより深い理解を得るために重要である。

欧米諸国での「母性」研究は、「近代母性のイデオロギー」を批判した 1963 年のベティ・フリーダンによる『新しい女性の創造』を皮切りに、エドリアン・リッチ、ナンシー・チョドロウといった一部のフェミニストの間で活発に展開される。1990 年代以降は、それまでの白人女性を前提とした議論から排除されていたマイノリティの「母性」研究がアメリカでも日本でも注目を浴びようになる。トニ・モリスン研究においても、「母性」のテーマで考察された研究書がみられるようになった。しかしそれらの研究は黒人女性の母性観が歴史的にどのように変化してきたかという歴史的、通時的視点を欠いた理論上の議論となっている。本研究は歴史的な側面と黒人女性文学の系譜を検討していくことの重要性に注目し、トニ・モリスンの小説がどのように「母性」の言説を政治的なレトリックとして用いているかを明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的はトニ・モリスンの小説において、「母性」という概念、言説、イデオロギーがどのような政治的レトリックとして用いられているかという「母性の政治学」を明らかにすることにある。モリスンの小説のなかで「母性」がどのように表象されているかを考察するだけでなく、アメリカ黒人女性の母性観の歴史的な変遷に着目する。そのため、19 世紀から 20 世紀にかけてアメリカ黒人の母性観がどのように変化してきたかを考察、分析する。19 世紀からの文献を考察するのは、アメリカにおいて 18 世紀末から 19 世紀前半を通して白人主流社会に広まった「共和国の母」、「家庭性の崇拜」、「真の女らしさの崇拜」といった理念によって、道徳心と宗教心の強い女性が未来の共和国の子供たちを養育する能力を生来的に持っている

るという「近代母性のイデオロギー」が構築されたからである。そして、そういった母性観が黒人女性にどのような影響を与えたかが 19 世紀の奴隷体験記や小説、当時の宗教雑誌や新聞記事といった文献を検証することによって把握できるからである。黒人女性たちが政治や文学活動を通してその主流イデオロギーをどのような政治的レトリックとして利用してきたかを分析し、その流れのなかでモリスンの小説における「母性」の具体的な表象を考察していくことによって、歴史的視座が欠如しているモリスンを含めたマイノリティ文学研究における「母性」の議論を補完することをこの研究は目的とする。

3. 研究の方法

本研究では歴史的視座からこれまでの黒人女性文学における「母性」の表象と母と娘の關係の考察を深めていく。そのために、アメリカにおける「母性」という概念の歴史的変遷をたどり、そのなかで、「母性」と黒人女性との關係を検証していく。具体的には、「母性」に関する黒人宗教雑誌や新聞の記事や黒人政治活動家による演説などの資料研究を進めていくことによってアメリカ黒人の母性観の歴史的変遷を明らかにする。また、19 世紀黒人女性の奴隷体験記から 20 世紀黒人女性作家による小説においてどのように「母性」が表象されているかを考察することによって、黒人女性文学における「母性」表象の変遷を明らかにする。そして歴史的、文学的「母性」の概念の変遷を踏まえて、モリスンの小説における「母性の政治学」を解明する。

4. 研究成果

「共和国の母」の理念は、一九世紀のアメリカ女性小説に大きな影響を及ぼした。当時「小説」は、「共和国の母」としての役割や使命をより多くの女性（白人）に広める教育的役割も果たしていたが、そのような過程のなかで、母と子が容赦なく引き裂かれてしまうことが奴隷制の残虐性を最も効果的に訴えるプロットとして機能するようになったといえる（「母性」の戦略）。「共和国の母」の理念はあくまでも白人女性を対象とされていたが、黒人女性の奴隷体験記を読むと、黒人女性がいかに白人読者と白人出版会の検閲を考慮し、この「共和国の母」の理念を戦略的に利用していたかが把握できる。

二〇世紀、とりわけ公民権運動後の現代黒人文学においては、一九世紀に流布した白人母性のイデオロギーがさまざまな形で批判されてきた。白人母性の定義に収まりきれない母性像を提示してきた代表的な作家としてトニ・モリスンがあげられる。モリスンは決して一義的に成り得ない母性像を提示してきた。しかしその一方で、奴隷制や人種観

の非常にデリケートな問題を扱う場合には、依然として根強く「母性」を戦略的に用いていると考えられる。本研究では、一九世紀の「共和国母」の理念を黒人女性がどのように用いてきたかを踏まえた上で、トニ・モリスンの『ビラヴィド』と『マーシィ』における母性の戦略を考察した。

(1) 黒人女性文学における「共和国の母」

奴隷制時代の黒人女性は白人女性とはまったく異なる状況下にあり、「母性」に対する捉え方も同じではなかったことは指摘するまでもない。黒人女性は、母親という役割は当然のことながら、それと同時にその他たくさんの役割を担ってきた。また奴隷制度のもとでは、黒人女性が母親であるということは、奴隷所有者の動産を増やし、奴隷制度自体に加担することを意味した。彼女たちに子どもを産む・産まない自由はないに等しく、産むことによって価値が高められた。特に一八〇八年以降、アフリカとの貿易が法律で禁止されるようになってからは、自国の奴隷の再生産でのみ動産としての奴隷を増やすしかなかった（シュワルツ 一）。黒人女性の中には、奴隷制の持続に加担することに抵抗する手段として、中絶や嬰兒殺害が意図的に行われていたことが最近の研究で明らかにされている（ロス）。

「共和国の母」のイデオロギーは、大半の黒人女性が当てはまらないにもかかわらず、一九世紀のスレイブ・ナラティブや現代黒人小説にいたるまで、さまざまな形で政治的に用いられてきた。一九世紀においては、奴隷解放運動や黒人女性の地位向上のために奴隷体験記や小説を書く場合、白人女性の母性のイデオロギーを巧妙に利用する必要があった。それを利用するかしないによって、社会を動かす原動力と成り得るかどうかの大きな分岐点となった。たとえばそれを利用したハリエット・ジェイコブスとあえて利用しなかったハリエット・ウィルソンの（奴隷）体験記の比較からも明らかである。

(2) 『ビラヴィド』と『マーシィ』における母と子の悲劇

白人読者や出版業界を意識せざるを得なかった一九世紀とは異なる状況下にある二〇世紀の黒人文学にあっては、白人母性のイデオロギーは批判されてきた。その主な方法として、白人女性の「母性」の定義には収まりきれない黒人「特有の」母性観を提示したり、個別な歴史的状況にありながら人種を問わず普遍的に共有する母性観を強調したりすることがあげられる。

そのなかの代表的な作家であるトニ・モリスンは、決して一義的ではない多面的な母親像を提示してきた。黒人文化の継承者として

の母、母親となることを放棄する母、わが子を殺害したり虐待したりする母、白人の価値観に染まってしまった黒人の母、包容力と破壊力の両面を持つ母などがその一部である。モリスンは、母の子に対する愛の形や強さが環境的状况や要因によって異なるものであり、母であれば誰もが無償の愛と育てる能力を備え持っているとは限らないことを明示してきた。

しかしその一方で、奴隷制や人種間の問題を扱うときには、白人を意識した母と子の関係が描かれている。小説『ビラヴィド』における母セサと娘ビラヴドとの関係と『マーシィ』におけるフロレンスと母ミンヤ・マエとの関係を比較考察すると、それが明らかになる。モリスンの『ビラヴィド』と『マーシィ』は、両小説とも、奴隷制によって引き裂かれてしまった黒人奴隷の母と娘の関係を中心に物語が展開し、母と子の悲劇を強調するという点で共通する。

まず、母と娘の関係であって母と息子ではないということである。ミンヤ・マエが「この世で女性であるということは、治ることのない開いた傷であることだ。表面は傷跡となっても、化膿しているのはその遙か奥なのである」（『マーシィ』一六三）と説明するように、労働だけではなく、性的搾取の危険にも常にさらされている黒人女性奴隷は、黒人男性奴隷よりもさらに弱い立場にあるといえる。奴隷制は容赦なく母と子を引き裂くが、引き裂かれる子が娘であることによって、奴隷制の非道さが強調される。

次の共通点は、さまざまな側面がある「母性」のなかで、妊娠、分娩、授乳といった生理的な側面と母と子の精神的な絆といった感情的な側面とが強調されていることだ。小説『ビラヴィド』では、母乳という生理的機能が繰り返し母と子の本能的な繋がり強調する。セサは、背中にケロイドが残るほど鞭打たれたことより、娘のための母乳を奪われたことのほうが、感情的に強い記憶として残っている。『マーシィ』では、母を伝染病で失ったリーナと、母と離別したフロレンスは共に、母となることと母を持つことに対する渴望を抱いており、自分の命を張ってわが子を守る母鷲の物語を語り合うことでお互いの傷を癒すという場面からも、母親が子を愛し、いつくしみ育てるといった感情が本能的なものであることが強調されている。

さらに、母の愛が、娘を殺したり手放したりするといった究極の形で表わされていることも共通する。セサもミンヤ・マエも、子どもを殺したり手放したりするという、通常であれば道徳に反する行為が、母親が判断するさらなる悲劇から子供を守るための究極の愛の形として描かれている。

そして、そのような母の究極の愛の形を娘

側は理解できず、それが娘のトラウマとなり、異常な復讐の形となって具現化することも共通する。幽霊ビラヴィドもフロレンスも、母の行為を糾弾し、それぞれの母親に対する憎愛は、異常な復讐心として後にあらわれる。セサの殺害した子供はビラヴィドとして一八年後に現れ、セサへの愛情をむさぼり、セサを肉体的にも精神的にも追い詰めていく。フロレンスは母との離別の場面が脳裏から離れることはなく、弟を抱えた母のスカートの裾にしがみついている自分に、母親が何か必至で伝えようとしている姿が悪夢となってその後何度もあらわれる。そのたびに母が自分より弟を選んだことが思い出され、フロレンスの弟に対する嫉妬と憎悪が増し、最後には鍛冶屋に引き取られていた赤ん坊マライクと弟が重なり、抑えきれない暴力として露呈するのである。

そして最後の共通点は、母と子の関係が最後まで修復されないということだ。なんらかの一時的な解決は提示される。幽霊ビラヴィドは最後、母の凶器が自分ではなく、白人に向けられることによって母の愛を確認できたのか、その姿を消す。また『マーシィ』では、か弱いポルトガルの貴婦人のような足裏が、今では「イトスギのように硬くなったから安心して」と呼びかける（『マーシィ』一六一）。しかし今でも「母がなんて言っていたかを知り、私が母に伝えたいことを母が知ることもできない」と嘆くフロレンスが母と直接和解できる場は永遠にない。そして母と娘の関係が修復されることはないという事実、読者はさらなる奴隷制の残虐性を痛感することになる。

これらの共通点は、奴隷制はあらゆる危険にさらされている娘をその母から引き裂いてしまい、修復できない苦痛を娘にも母にも与える、このうえなく残虐なものであるという読者の共感と同情を促すものである。

(3) 「母性愛」の強調と矛盾

寺沢氏の指摘するように、「母性愛ゆえの子殺し」を正当化しようとする試みはさまざまな矛盾を作っている。たとえば、一刻も早く逃亡しなければならぬセサがわざわざ女主人に自分の母乳を奪われたことを報告しに行くという設定や、まったく道もわからない妊娠六カ月の、しかも拷問を受けて歩くことさえやっとのセサが無事に子供を産んで一二四番地にたどりつけたのに、道をわかっている健康な男たちがたどりつけないという設定などだ。また、なぜセサのビラヴィドに対する深い愛情が他の子どもたちには感じられないのか、といった不自然さもある。しかし、通常の読者は、矛盾に気づくことなく、あるいは時間的、状況的な実行可能性などは問題にすることなく読み進めていく。そ

して、このように母と子を残酷に引き裂く奴隷制はなんとひどいのかと心打たれながら読み進める。通常の読者が矛盾に疑問を抱かない理由は、母の子に対する絶対的な愛の存在を疑わない近代母性愛の神話に染まっていることを示している。

『マーシィ』におけるフロレンスと母の描かれ方は、奴隷制によって引き裂かれる母と娘の悲劇を描いているという点では『ビラヴィド』と共通するが、『ビラヴィド』では見過ごされてきた矛盾や不自然さが、『マーシィ』では顕著であるという点で異なる。フロレンスと母との関係は、かなり不自然である。たとえば、まだ何も理解できないうちに殺された二歳の娘の幽霊が母の愛をむさぼるのは理解できても、幽霊でもない一六歳になったフロレンスが過去の記憶にある弟への嫉妬心から我を忘れてマライクの肩を脱臼させるという暴力的行為は理解しがたい。

フロレンスやソロウの母と子の関係の違和感は、物語の時代背景とのずれからも生じている。『マーシィ』は、ヨーロッパ諸国から宗教の自由や土地を得るために階級、人種、価値観の異なる人々が渡った新大陸アメリカを舞台に、どのようにして混沌たる状況から秩序が構築されていったのかを、歴史的資料を基にその時代を忠実に描きだそうとする。とりわけ、人種という概念がどのように生まれ、奴隷制度へと発展していったかは小説を通して重要なテーマとして扱われている。一七世紀植民地時代は、人が奉公人であるかそうでないかという線引きは存在したが、肌の色での線引きは明確ではなかった。『マーシィ』では、白人奉公人、自由な黒人、先住民、黒人、イギリスから親に売られた白人女性、混合人種の女性といった背景の異なる人物それぞれに焦点が当てられ、「人種」という概念がどのように構築されていったかが描かれている。

そのなかで非常に重要な場面がある。それはフロレンスが鍛冶屋への使いの途中泊めてもらうイーリング未亡人の家で、黒人であるがゆえに魔女の嫌疑をかけられる場面である。この場面が非常に重要な理由は、混沌とした植民地社会で価値観の異なる人々が秩序と安定を模索するなか、黒人が社会の闇の部分を表す存在として排除されていく過程が、白人ジェインから黒人ジェインに魔女の嫌疑が移行する過程を通して描かれているからである。

この場面は母と娘の描写においても極めて重要な場面といえる。ここにはイーリング未亡人とその娘ジェインという母と娘が登場するが、その母と娘の描写も時代に忠実であるといえる。イーリング未亡人の娘であるジェインは生まれつき目に障害を持っており、そのため魔女の嫌疑をかけられている。

イーリング未亡人は、魔女狩り集団に糾弾される娘を守るために、娘の足に傷をつける。というのも悪魔は血を流さないため、娘が血を流し続けさえすれば悪魔の嫌疑から逃れられると考えているからである。しかしジェインはこのような仕打ちを受けながら、自分が置かれている立場を母親以上に冷静に理解している。ジェインは自分が魔女の嫌疑をかけられるのは、村の人がイーリング未亡人とジェインが所有する「牧草地」を手に入れようとしているからだということ、村の父権的な権力構造に母が獲りこまれてしまっていること、そしてそれに母が全く気付いてないということなどを鋭く見抜いている。その上で自分を傷つける母を責めることなく冷静に受け入れているのである。

イーリング未亡人が娘を傷つけるのは、娘に対する愛が欠如しているからではない。セーラムを始めとした魔女裁判が示すように、一七世紀には魔女や悪魔は身近に存在するものとして恐れられていた。イーリング未亡人も悪魔が存在することに対して疑うことはなく、また、悪魔かそうでないかの判断は共同体の権力者に委ねられていることに対して疑問を抱くことはなかった。日々さまざまな災害や不幸と直面する植民地時代、一人で生きていくこと難しかったため、共同体の規範を守り、その一員として認められることは非常に重要であった。そのため、娘を傷つけることは、悪魔の嫌疑をかけられて殺されるという最悪のシナリオから娘を守りつつ、共同体に居続けるための苦肉の策といえる。

イーリング未亡人は娘を愛してはいても、その愛に感傷的に浸る余裕は到底ない。ここでのジェインとイーリング未亡人との関係は、フロレンスと母の関係のように美化されたり、母性愛が強調されたりすることはない。イーリング未亡人は、フロレンスと母のように娘のために地面に跪くことも、感情を表に出すこともない。それどころか、ジェインに対してかなりの距離さえ感じられる。一方ジェインは、そのような自分を傷つける母親に対して、フロレンスが母親に対して抱くような恨みを持つことはない。ジェインとイーリング未亡人との関係は、この場面を通してあくまでも背景に留まっており、それは先にも説明した当時の出産や育児が日々の生活の一部であった様子を描き出している。この場面における母と娘の描写を、「特別」なものとして母性愛が前景化されているフロレンスやソロウの母子関係の描写と比較すると、後者の時代との矛盾が際立つのである。

(4) 戦略としての「母性」

寺沢氏はモリスンの小説『ピラヴィド』における母性愛が、「奴隷であろうとなかろうと、母親が子供に対して抱く普遍的な母性愛

などではなく、白人に対する黒人側の絶対的被害者性を主張する道具として子供が有用になる場合にのみ言い立てられる「愛」である」(寺沢 二六四)ことにモリスン自身が気づいていないと指摘する。しかし、むしろモリスンは、母と子の絆を引き裂いてしまうことが、奴隷制の最大の罪なのだという訴えが成り立つことを十分に把握していたうえで、白人の犯した過去の残虐な行為、とりわけ、性的な搾取の告発は今もなおデリケートな問題であり続けているということも十分に把握したうえで、「母性」を戦略的に用いているといえる。

モリスンの意図的な操作は、『ピラヴィド』の基になった実話との相違点からもみられる。『ピラヴィド』は、自分の子供たちが奴隷制につれもどされるよりは死んだほうがましだと信じ、二歳の子どもを殺害し、他の三人も同様に殺そうとしたマーガレット・ガーナーという逃亡奴隷の実話をもとにした物語である。歴史的人物としてのマーガレット・ガーナーは「非常に興味深い」が「限定的」であると考えたモリスンは、殺された二歳の子供を蘇らせ、母親との葛藤と絆を中心に物語を展開させる。実話では母親と家族の七人が一緒に逃亡したが、それをセサー人があらゆる障害を乗り越え、愛するわが子へ母乳を届けるという物語に書き換えたことから、「母性愛」を強調したいという作者の意図がうかがえる。

また、モリスンの作品では具体的な性的暴力は露呈されない。小説『ピラヴィド』の基となった実話のマーガレットの三人の子供は、夫の子供ではなく、おそらく白人主人の子供であったと考えられているが、小説ではあえてそれに関しては触れられていない。通常読者はセサの子どもが全員夫ハーレの子であることを疑わずに読み進めるが、エイミーに誰の子か聞かれてセサが答えずにいたときに、「自分でもわからないのね」(『ピラヴィド』九二)とエイミーが述べる箇所からも推測できるように、実はそうではない可能性も高く、しかしそれをあえて曖昧のまま残し、なるべく父親が誰かということには触れられていないのである。そうすることによって、人種間のデリケートな問題をさげ、「子どものための母乳を奪われた」ことが最大の苦痛であることに問題を転嫁していると考えられる。また『マーシィ』でも、フロレンスと弟の父親は、白人主ではなく、その命令に従った黒人奴隷になっており、ドルテガとその妻の性的暴力があったということは、読者が察することができる程度にとどまっている。

母性愛を切り札にすることで、奴隷制の残虐さを読者に「共感」させ、奴隷制を告発することができる。またそれだけではなく、白人

男性の黒人女性に対する残虐な性的搾取を一方的に責めることを回避する緩和剤の役割も果たしている。つまり、人種間の暴力、とりわけ性的暴力に対する告発を母性愛の問題へと転嫁することによって、白人を直接的に攻めることなく奴隷制の非人道性を訴えることが可能となるのである。そもそも、ウィルソンのように白人読者に跳ねのけられてしまえば、告発は意味を持たず、まずは読んでもらい、反発をそそることなく受け入れられることが重要である。そしてその戦略が未だに成り立つということは、現代社会においても、母性愛が賞賛され、母性愛神話が根強く受け入れられていることを示している。一九六〇年代の公民権運動や女性解放運動後の人道主義や PC に敏感である現代の読者にとって、この感情的な「共感」を促す「母性」の戦略は極めて有効に働くといえる。しかし『マーシィ』における作為的と思える母と子の不自然な描かれ方は、「母性」の戦略の有効性を認識しつつも、人種が未だにデリケートな問題で在り続けている二一世紀アメリカの現状に対する苛立ちと批判の表れとして読めるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① YUKIKO TODA、 “Motherhood in Contemporary Japan” *Gender Studies: News and Views*、査読有、No.20, 2009, 2-6.

[学会発表] (計3件)

① 戸田由紀子、「モリスンの Beloved と Mercy における「母性」の政治的戦略」、アメリカ文学会中部支部大会、2009年4月、名城大学サテライト

② 戸田由紀子、「現代黒人文学とオバマの自伝」、第53回関西アメリカ文学会支部大会、フォーラム「バラク・オバマの自伝を読む-文学研究からのアプローチ」、2009年12月、奈良女子大学

③ Yukiko Toda, “Motherhood and Family in Contemporary Japan,” *Gender and Family in Southeast Asia*, Dec. 11-15, 2008., Chinese University of Hong Kong,

[図書] (計3件)

① 大井浩二監修、相本資子・勝井伸子・宮沢是・井上稔浩編、英宝社、『異相の時空間—アメリカ文学とユートピア』の中の『共和国の母』の理念と『母性』の戦略—トニ・モリスンの『ピラヴィド』と『マーシィ』、2011

年、156—172 頁

② YUKIKO TODA, 英宝社、*The Bakhtinian Concept of Chronotope and Toni Morrison’s Novels.*、2009、176 頁

③ 風呂本敦子・松本昇編、南雲堂フェニックス、『英語文学とフォークロア—歌、祭り、語り』の中の「赤ずきんちゃんとフェアリーテール—アットウッドの『侍女の物語』とカーターの狼シリーズ」、2009 年、98—211 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸田 由紀子 (TODA YUKIKO)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：40367636

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし